



1998年(平成10年)
11月号(No.642)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

火山ガスの危険性を訴える……………	1
追悼	
田口二郎会員を偲びて……………	4
川崎泰男会員逝く……………	4
アイガー北壁の日本ルート……………	5
さんけんだより……………	6
報告	
全国支部懇談会「お山かけ」…	8
自然保護委・木曾赤沢自然林…	8
三水会・丹沢大山集中登山…	9
92同期会・富士山……………	9
支部だより	
信濃支部・ミセスウエストーン祭10	
東九州支部・別府湾リレー登山10	
岐阜支部・韓国雪岳山へ……………11	
わが支部とっておきの一山	
福井支部・平家岳……………12	
宮崎支部・大崩山、湧塚、岩峰…12	
山形支部・加無山……………13	
海外の山……………14	
東西南北	
『登山医学の最前線』を読んで 15	
『登山医学の最前線』補足 ……15	
信じられない遭難……………16	
憧れの冬季マッキンリー……………16	
図書紹介……………18	
ネパール国際山岳博物館募金…………20	
新入会員・書籍受入報告…………20	
会務報告……………21	
会員異動・ルーム日誌……………22	
INFORMATION ……23	
▶日本山岳会事務取扱時間	
月・火・木……………10～20時	
水・金曜日……………13～20時	
第2、第4土曜日……………閉室	
第1、第3、第5土曜日……………10～18時	
▶図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 ……	
……………13～20時	

火山ガスの危険性を訴える ―本会も後援してシンポジウム開催―

神奈川工科大学教授 森 武昭

昨年九月十五日に、安達太良山で登山者四名が火山ガスで死亡した事故は、われわれの記憶に新しい。これを含めて、昨年一年間で九名が火山ガス災害で亡くなっている。

このため、環境庁は環境基本計画による「国立公園内等における火山ガス中毒事故発生及び安全対策に関する緊急調査」を実施し、「わが国の火山ガスの実態及び火山ガス事故の状況調査報告」として公表した(本会図書室にも寄贈されている)。その結果、わが国の五十七の火山・地域の六百四十カ所以上の噴気孔で火

山ガスが噴出していることが確認された。また、一九五〇年以降少なくとも十一の火山・地域で四十九人が火山ガスで死亡していることも確認された。

一方、科学技術庁では、火山ガス災害防止のために平成九年度科学技術振興調整費で「火山ガス災害に関する緊急研究」を実施した(会報六三四号六ページ参照)。そこで、秋の行楽シーズンを前に、この研究成果の報告とその成果を今後どう役立てるかを目的に、同庁主催で関係省庁と本会が後援して、九月十九日午

後、法政大学市ヶ谷キャンパスでシンポジウムを開催した。当日は、研究者・自治体関係者・関連メーカー・登山者など約百名が参加し、熱心な討論が繰り広げられた。

第一部では、東京工大名誉教授小坂丈予氏がコーディネーターとなり、国立の五研究機関(地質調査所・防災科学技術研究所・資源環境技術総合研究所・国土地理院・気象研究所)の研究者がパネリストとなって「火山ガスについて何が解ったか」という表題で今回の緊急研究の成果をわかりやすく報告した。

第二部では、筆者がコーディネーターとなり、「火山ガス事故から身を守るためには」という表題で今回の研究成果をどう役立てるかを議論した。環境庁自然保護局の後藤乙夫氏、帝京大学医学部の矢野英二氏、福島南高校教諭の千葉茂樹氏、読売

新聞運動部の井原敦氏、朝日旅行会の一力英夫氏(本会会員)の五名のパネリストがそれぞれの立場から意見を述べ、その後フロアからの発言も交えて意見交換した。時間がなかったため十分な討議が行えず、今後の方向性を必ずしも明確にできなかったのが残念であった。

本稿では、このシンポジウムの報告をかねて、火山ガスの危険性に対処法をできるだけわかりやすく説明すると共に、今後の課題に関する筆者の見解を以下に示す。

一、火山ガスの種類

図(三ページ)のように、火山ガスには高温型と低温型の二種類がある。高温型は、マグマから直接地表に放出されるもので、火山活動と密接な関係があり、水蒸気を多量に含んでいるのが特徴である。この型では、二酸化硫黄(SO₂)が問題となる。

低温型は、ガスが地中を上昇中に水の凝縮やガス成分同士の反応などによる変質が進んだもので、硫化水素(H_2S)と二酸化炭素(CO_2)が問題となる。火山活動が沈静化するにしたがって、山腹や山麓の噴気孔(小規模だが数が多い)から放出されることが多い。次に各ガスの特徴と対処法について述べる。

二、二酸化硫黄(亜硫酸ガス) SO_2

浅間山・三原山・阿蘇山・桜島など火山活動の活発なところで温度の高い水蒸気と共に、火口やその周辺の噴気孔から放出される。その上、

無色だが不快な強い刺激臭があるので、ガスの存在は分かりやすい。このガスは、非常に水に溶けやすいので、濡れたティッシュ(濡れタオルならさらによい)などで鼻や口を覆うだけでも有効な対策になる。一般に健康者であればほとんど問題とならないが、喘息患者にとっては極めてわずかな濃度(0.2 ppm)でも発作を起こし、死に至ることがあるので、十分に注意する必要がある。阿蘇での火山ガスによる死亡者の大部分は喘息患者であったことが確認されている。わが国では、本人が



高温ガスの例：阿蘇中岳火口(撮影・地震調査研究所 須藤 茂氏)



低温ガスの例：安達太良山沼の平(撮影・科学技術庁 小荒井衛氏)

付近には絶対に近寄ってはならないし、この情報を周知徹底する必要がある。

三、二酸化炭素(炭酸ガス) CO_2

地下マンホールに作業員が入るときに酸欠状態になっていないかを確認しないで事故が起きるケースがあるのと同じように考えればよい。このガスは無色無臭で、噴出個所周辺の植生にも変化がないので気づきにくい。しかし、死を招くような高濃度になるのは、洞窟や窪地のようにガスが滞留する個所のみなので、地形に注意すればほとんど問題になる

自覚していない潜在的喘息持ちが人口の四パーセントいると言われている。阿蘇では年間百万人が訪れるので、確率的には四万人が危険な条件下にあるということになる。したがって、喘息の治療を受けている人はもちろん、喘息の恐れのある人は、水蒸気を噴出している火山の火口

ため危険である。比重が空気よりも重いので、無風または微風の際に窪地や谷のような低い地形のところに滞留する。

一般に、噴出個所周辺では、植生の変化、地肌の変色、キツネ・ハチなど小動物の死骸の存在などの目に見える影響を伴うことが多いので、このような場所には近づかないことが重要である。安達太良山の地元研

ことはしない。わが国での死亡事故としては、昨年の八甲田での事故が唯一確認されているだけである。

なお、二酸化炭素に関しては、酸欠の検出装置を持参して安全を確認する以外には、高濃度になる恐れのある個所に近づかないことが唯一の対処法なので、この点は十分に注意する必要がある。

四、硫化水素 H_2S

このガスは、非常に毒性の強い神経性のガスで、呼吸中枢を麻痺して呼吸困難をもたらす。昨年の安達太良山を含めて、いままでの火山ガス災害の大部分を占めており、対応も難しい。硫化水素は無色で、卵の腐ったような悪臭を放つが、高濃度になると嗅覚が麻痺していつのまにか悪臭を感じなくなってしまう。山腹や山麓の噴気孔から放出されるが、火山周辺の温泉水からも分離発生し、目に見えない形でじわじわ出ているため危険である。比重が空気よりも重いので、無風または微風の際に窪地や谷のような低い地形のところに滞留する。

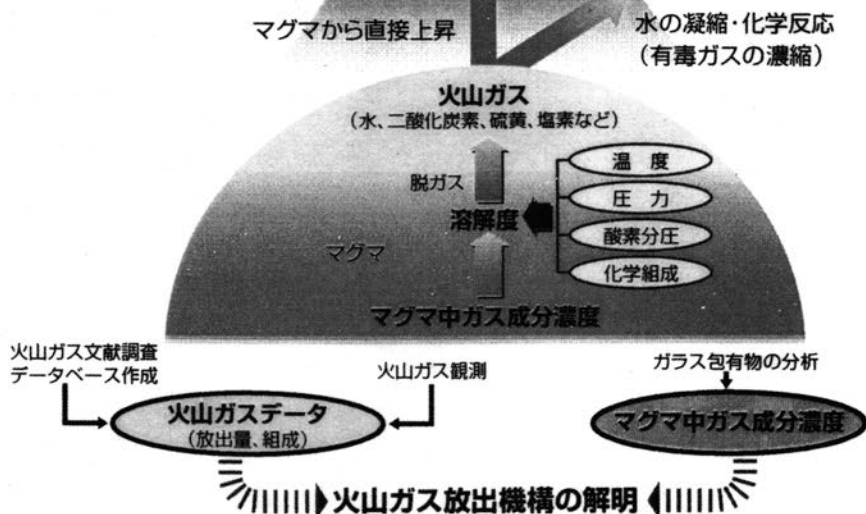
火山ガスはマグマからどのように放出されているのか？

高温型火山ガス

- ・二酸化硫黄、塩化水素が多い
- ・阿蘇、桜島、薩摩硫黄島など
- ・火山活動に関連

低温型火山ガス

- ・硫黄水素、二酸化炭素が多い
- ・安達太良山、八甲田山など
- ・全国に噴気地帯あり



究者からは、事故のあった沼の平近くにあった硫黄鉱山（現在は廃鉱）では、晴天や雨天のときは心配しなかったが、曇天で風が弱い日には注意していたこと、釘の色が赤いときは心配しなかったが黒く変色したときは近づくことがなかったこと、が報告されている。

対処法としては、水に溶けやすいので濡れタオル等で鼻や口を覆うとある程度有効とされているが、硫化水素の危険が指摘されている山域には、前述のような気象条件のときには、低い地形に近づかないことが何よりも大切である。

なお、万一他の登山者の事故に遭遇したときには、意識を失っても即死することはないので、できるだけ助け出す努力をしなければならぬが、二次遭難の危険が大きいので、その対応には十分な注意が必要である。具体的には、少なくとも濡れタオルで鼻や口を覆うこと、低いほどガス濃度が高くなっているのを決して身を低くしないこと、大きな息を吸わないことを原則として、後は現場の状況に応じて対処せざるを得ない（『岳人』十月号一四七～一五二ページ）。

*

登山は危険を伴うものであり、その行動は各自の自己責任で判断する

のが大前提である。火山ガスについて言えば、その判断材料をいかに提供するかが今後の課題である。具体的には次の二点に集約される。

①今回、環境庁が火山ガス災害の危険性のある山の地図を作成したのを受けて、該当する山域の地方自治体で、具体的なガスの噴出地点や危険個所の地図を作成し、一般に公開して登山者の判断材料に供するべきである。

②自治体のみでは科学的裏付けとなるデータを得るのは困難なケースが多いと思われるので、今回の緊急研究に参加した研究者または研究機関がサポートして、より正確で最新のデータ（噴気孔は移動することがあるし、常時一定量を噴出しているとは限らない）を収集するように努める必要がある。そのためには、予算面を含めて、国・地方自治体・地元関係者が有機的に連携して取り組むことが重要である。

筆者は火山ガスについては専門外であるが、今回の緊急研究に登山者の立場から参加して、「火山ガスは恐ろしくて危険であるが、ガス災害に関して正しい知識とデータを持ちあわせていけば、事故は確実に防げるし、安全登山に支障をきたすことはない」ということを改めて認識させられた。（科学委員会理事）

追悼

田口二郎会員を偲びて



渡辺兵力

去る九月二十三日秋分の日、早朝に、本会の名誉会員田口二郎さん(会員番号一五九〇)が鎌倉の病院で亡くなった。享年八十五歳。田口さんはここ数年来、体調を崩して、時々入院を繰り返していたが、在宅中(鎌倉市長谷)は仲々元気で、山岳会の友人たちもよく見舞いに行かれたようだが、彼の気炎に、そして話好きに、見舞い客のほうが楽しんだことが屢々あったらしい。今回も、洵に急な逝去で、しかも亡くなった翌日が葬儀であったのに、お別れの会にはたくさんの方々が参加された由である。田口さんの生前の人物の現われとてよいが、日ごろの多くの友情を抱いて安らかに昇天したと信じていたい。

田口さんは、山岳会創立五十周年の行事として計画された本会のマナスル遠征登山(一九五二―五六年)

に参画した。この計画は終戦後の日本の登山界としては最初の海外への行動であって、彼はマナスルの偵察隊(今西錦司隊長)と第一次隊(三田幸夫隊長)とに参加してマナスル峰(八六三メートル)の頂への登路を見付けることに活躍をした。戦争が終わって約十年という当時の日本には、本格的な氷河の登降を経験した若い登山家はほとんどおらず、本会の会員では故高木正孝と田口二郎の二人だけが雪線以上の「山」を知っているという貴重な存在であった。

田口さんは、戦前の私立甲南高等学校の出身者(一九三三年卒)で、彼の兄の故田口一郎さんとともに、関西の高校生登山家としてはかなり有名であったらしい。田口兄弟は東京帝国大学にやってきて、それぞれ当時のスキー山岳部生活に精進していた。卒業後、時期については詳らかでないが二人は英国に渡り、ロンドン大学で経済学の勉強をしていたという。この間、スイス・アルプスに出かけて登山をやっている最中に欧州で戦争がはじまり英国に帰れず、余儀なくスイス生活を続け、終戦の翌年に二郎さんは米国籍の引き揚げ船で故国の土を踏むことが出来た由。彼は日本の山仲間たちが戦争で苦しんでいる期間に西欧生活をして時々山登りを楽しんでいたことを心

苦しく思っていたようであるが、学生としてあるいは一生活者としてアルプスの第一級の登山活動を体験し得た、当時の日本人としては極めて希な西欧文化の経験者の一人であった。このことが、晩年になって、大変な勉強の末、名著『東西登山史考』(岩波・同時代ライブラリー・二二三、一九九五年刊)を生む一つの素地になったのだと、筆者は了解している。

私は、大学生時代に田口さんと数回山行を共にした後輩であったが、私の南極行(一九五五年)の頃から時々飲み屋で杯を交わすことがあった。やがて縁あって一九八一、二年ごろいっしょに山岳会の役員を経験し、お互いに日本山岳会なるものを知るようになった。前掲の彼の唯一の著書はかつて『山岳』に投稿した「横有恒の山を見る目」の作文が重要なきっかけになったらしいが、この横さんについての草稿を私のところに送ってきて意見を述べよと言われたことがあった。

彼の本の第一部「日本でのアルピニズムの流れ」における考え方には折に触れてわれわれの間で話題になったと思うが、一巻の書として突然私のところに送られてきて、私自身これを一気に読了した時、「アッ公やったぞ!」と思わず心の

底で叫んだ。とくにⅠ「日本でのアルピニズムの展開」が、大島亮吉、今西錦司の登山観から展開されているところが、この両先輩と面接のある私にとって非常に共感できた。そして田口さんがこうした発想を持っていたことに驚きもした。Ⅱ「ヨーロッパ登山史」の扱い方については異論を持つ人もいようが、田口さんにしか書けないといつてよい視点でもある。私の気に入った点は登山の「流儀」という用語の導入である。日本の今日の登山界は多様化してきて、これからどうなるのかが、日本山岳会の立場からも問題になるが、こうした論議をやるとういう時、田口さんを失ったことは洵に残念である。

合掌。

追悼

川崎泰男会員逝く



木村俊博

川崎泰男氏(会員番号七六〇〇)が、八月二十二日、膵臓癌のため死

去されました。享年七十三歳。同氏は大正十三年神戸市に生まれ、長年にわたり兵庫岳連の理事長、副会長としてその発展に尽くされました。また、日山協理事、評議員、参与として運営に参画し、関西岳界においては知らぬ者のない人材でした。とくに台湾の山には造詣が深く、中華山協の蔡禮樂名誉理事長とは親戚付き合ひの仲でした。平成六年本会実施の「親善訪台登山」には、一

団員として参加、協力されましたが、その闊達な風貌はいまだ記憶に新しいところですよ。葬儀には、日山協、岳連の役員、多数の関係者の外、中華山協の蔡禮樂氏が遠路来日し、参列されました。本会からは関西支部より供花を行い、通夜、葬儀には阿部関西支部長はじめ関係者が参列しました。慎んでご冥福をお祈りいたします。合掌。

アイガー北壁の日本ルートをめぐる

岡澤祐吉

一九九八年の夏はヘックマイアイーがアイガー北壁を初登攀してから六十年目にあたるので、現地ではいくつかのイベントがあった。このイベントに関連して六月には、『アイガー——垂直の闘技場』という本が出版された。編著者はスポーツ・ジャーナリストで、スイス山岳会発行のガイドブックや、機関紙『ディ・アルペン』の書評を担当し、スイスの新聞にアルピニズムに関する記事を何回も書いているダニエル・アンカーである。

本会会報の「海外の山」では、ポイントとなるこれまでのアイガー北壁登攀についてはそのつど報告されているので、注意している会員はご承知と思う。今回のアイガー本はトニー・ヒーベラーが亡くなってから現在までのアイガー北壁登攀についても書きすすめており、今のところアイガーに関する本でこれに並ぶものは見あたらない。

今回のアイガー本で特に目を引くのは、横さんの『山行』が、アイガーに関する部分ではあるが、本会の宮下啓三会員によってドイツ語に翻訳され、載せられたことだろう。八千メートル峰十四座に登ったエアハルト・ローレタンを擁するスイス登

山界のなかで、過去の思い出として小さく扱われそうなのだが、わざわざ一章を設けて載せられているのである。このことと関係があるかどうかは分からないが、出版元のAS社はこの本の出版にあたり記者会見をしたと伝えてきた。

今回のアイガー本で興味深い点は、戦後の日本人によるアイガー北壁登攀をスイス登山界がどのように見ていたのかということである。特にアイガーのジャパニーズ・ディレクティシマについては、ドイツ側の扱い方が年を追って変化しているように感じられていたからだ。

一九六九年のドイツの山岳雑誌

スズメ、セミ、クラゲ、ヒガンバナ……。一緒に遊んでもらった動植物へのオマージュ。

串田孫一・文／辻まこと・画

わたしの博物誌

稀代のモラリストと登山家でもあった自由人の二人が、失われゆく自然への深い思いを込めて作り出した伝説的画文集。時を超えていまオリジナル原寸で初の刊行。¥8500(税別)

日本アルプス

宮下啓三 日本の山をアルプスという意味は？ウェストンから三島由紀夫まで、その歴史と魅力を分析した山岳文化史。¥2500(税別)

みすず書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21

tel. 3814-0131 fax. 3818-6435

『アルピニスムス』には、ジャパニーズ・ディレクティシマが大きく取り上げられている。そこに、一九六三年にスイス・ワリス州のガイドのダーベライがソロでヘックマイアイー・ルートを登ったとき、日本人が登ったときほど大騒ぎしてはくれなかった、とワリス州のガイド組合が文句をつけたという新聞記事が並んでいた。この時はベルン州のガイドが間に立ち、穏便にことを収めたかった。しかし、その翌年の一月二十日、五人のベルン州の若者が、冬の日本ルートをわずか六日間登ってしまった。彼らは、前年の十二月に続き一月四日にも登っていて、ど

れも悪天候のため途中で引き返し、

この時残した固定ザイルなどを再利用した。彼らの一人は、「羊に踏み荒らされた牧草地」のような岩壁を日本ルートに想像していたらしいが、「そんなことはなかった」と言っていて、彼ら自身も楽な条件で登ったわけではない、との気持ちが見え隠れする。さらにこの年の冬には別の日本チームがハーリン・ルートの冬期第二登を果たしたこともあり、彼らの成果について、トニー・ヒーベラーなどは、日本ルートに残っていたハーケンやボルトなどを使えば難しい登攀ではなかったろう、と評価していた。

何年か前、来日したドイツ山岳会(DAV)のメルツ会長からもらったDAV発行の登山史の本には、ジョン・ハーリン・ルートの説明が載っていて、そこには、エキスペディション・スタイルの岩壁登攀に否定的なヘックマイヤーや、「エキスペディション・スタイルの岩壁登攀はパロディ」と皮肉ったリカルド・カシンの名前があげてあり、少々気になった。カシンは最近、スイス山岳会の名誉会員になってもいる。その後の項目のアイガーのジャパニーズ・ディレッティシマ・ルートについては、他では見られない、登攀に要した費用と装備の量が書き込まれ

ていた。

トニー・ヒーベラーは、取材を通して日本のクライマーとは個人的にも知り合いとなり、好意的姿勢を保っていたが、ジョン・ハーリンらのエキスペディション・スタイルによる岩壁登攀の是非について、当時、熱い議論がたたかわされたことは承知していたようで、このころの『アルピニズム』には、一九六九年、一九七〇年の日本チームの使った費用と装備の量が大きく報道されている。一九七〇年の場合は再度議論するためとして、この時の登攀の全容が報告されている。

*

今回、ダニエル・アンカーからの取材に応じるため、日本で最初にアイガー北壁を登った高田光政氏に協力をお願いしたが、高田氏の岩壁登攀の考え方にも、エキスペディション・スタイルについて否定的なもののあることが分かり、高田氏のドイツ語のレポートもアンカー宛に送付した。

『アイガー——垂直の闘技場』(ダニエル・アンカー編著)の見開きには、一九七〇年に日本ルート冬期初登攀を成し遂げたスイス・チームのカラー写真が載っていて、彼らの登攀はアルピニストとして国家的成功を収めたと書いてある。

さんけんだより

新米管理人奮闘記・5

木村太郎・弥生

この奮闘記が会報に掲載されるのは、山研での今年の仕事も終了しているころでしょう。

上高地における半年間を振り返ってみると、落雷による停電、夏の長雨、群発地震などいろいろなことがあり、このようなハプニング以上に新米管理人の心に残ったのが、山研を利用された方々との出会いでした。

乳がん手術直後の身体で山研にこられ、その方の嬉しそうに過ごされているのを見て、生きている喜びをおすそ分けしてもらったような気がしました。

しかし残念なことに、新米管理人として困惑してしまうような方もありました。「飲食は集会所(食

堂)で」のルールがあるにもかかわらず、その方たちの帰られた後は、二階の部屋だけでなく風呂場からも日本酒のビンが出てきて、驚いたり呆れたり。

中でも一番困るのが、予約なしでみえる方です。私たちは週に一度松本まで食糧の買い出しに行っています。自分一人くらい、と思われているのでしようが、そんな方が五、六名になると自分たちの食材を削って味噌汁の具にするようになってしまいます。また、突然の宿泊のために部屋割りをし直し、他の利用者の方々に迷惑をかけ移動願うこともあります。

天候などの理由で仕方なくという場合もあるでしょうが、その時はせめて近くの小屋等から電話を入れていただければ、と思います。山研は日本山岳会会員の方々すべての大切な財産。この財産をいつまでもきれいに残し、多くの方々がこの山研での「ひととき」を心ゆくまで楽しめるよう、会員皆様のご協力とご理解を来年もお願いします。

アイガー岩壁に開かれた十の新ルートの表には、当然、日本ルートも並んでいて、その装備は、ボルト二五〇、ノーマルハーケン二〇〇、ザイル二四〇メートル、その他の装備一トンとあり、一九六三年にソロで登ったダーベライの、三〇メー

ルのザイル、ノーマルハーケン八、アイスハーケン三、他にハンマー、アイスパイル、シュタイクアイゼン、ヘルメット、ビバークザックと比べ、対照的に見える。

メスナーがアイガー北壁を登ったのは一九六八年だから、日本ルート

はその翌年ということになる。

ジャパニーズ・ディレクティブ・シマの説明は、当時流行の人工登攀による登り方、と理解を示す書き方ではあったが気になった。

そこでトニー・ヒーベラーなどとの意思疎通が当時、十分とれていたのかどうか知ろうと、一九六九年の『アルピニズム』を今一度読み返してみた。

このころのヒマラヤ遠征隊に加わる医師をわれわれはドクターと呼んでいたのだが、一九六九年の『アルピニズム』の記者は、ドクターの今井氏を、MDつまり医学博士と理解していたように思われる。因みに前述のDAV発行の登山史も、今回のアイガー本も、当時の今井氏については女医としてある。

今回のアイガー本では、フランスの女性クライマー、カテリーヌ・デステイヴァルのように、冬期にアイガー北壁をソロで登るもの(デステイヴァルはマッターホルンにもグランド・ジョラスにもソロで冬期に登っている)が出てきて、男性の支援を受けての登攀を外し、女性だけの登攀史(登山史)を綴ろうとしている。この夏のアイガー北壁登攀をテレビ中継するときも、カメラを持つ男性ガイドとは別に、女性のガイドが二人だけで登っているはずであ

る。今回の本はエキस्पедиション・スタイルに否定的なようだが、今井氏の場合、北壁での初登攀に加わった最初の女性として同氏の名前があがっている。

長谷川恒男氏のソロによる冬期初登攀について今回のアイガー本は、ジラルディーニが同じ時期に三つの北壁(ヨーロッパでは三大北壁とは言わず、「アルピニストの三部作」と表現している)に登ったこともあり、「遠く離れた決闘」という表現を使って面白く書いている。

フランスのクリストフ・プロフィヤエリック・エスコフィがパラグライダーやヘリコプターを使って夏と冬に三つの北壁を短時間で登ったが、無名のスロヴァキア人、トモ・チェセンが自分のボロ自動車走らせ六日間三つの北壁を登ったことも、今回のアイガー本では取り上げている。鳴り物入りでなかったことがスイスの登山界で好意的に見られたのかもしれない。

一九八三年にアイガー頂上直下に理想的ディレクティブ・シマ・ルートというものが、スロヴァキアのバヴェル・ボシリによって引かれたが、悪天候に三十日間もあそばれた末の登頂で、彼の生還は奇跡的と言われた。

そして今、アイガー北壁ではフリ

ー・クライミング可能なルートが探られ、スポーツ・クライミングのルートさえ作られつつある。日本なら谷川岳、穂高岳、北岳、剣岳といったところなのだろうか?

スイス山岳会の機関紙『ディ・アルペン』の現在の編集長は、かつて植さんがスイスのガイドから受け渡されたという登山者魂について、次のように説明していた。

「登山者魂は生活態度や人生観と一致するものだ。それらは無私とか犠牲的友愛、あるいは正しいと認識される理想への誠実さや、それに伴う自分自身への誠実さによっても特徴づけられる。われわれの行為はこ

で鏡となって、われわれ自身の一部を映し出すことになる。この同一性、われわれの能動的な行為にとまなう真実で、より高いものへ向おうと努力する本性に一致(合致、調和)するものである。」

「より高いもの」は高い山を指すだけでなくでもないらしい。

トニー・ヒーベラーからは、なぜ日本人はヒマラヤにあんなに大勢行くのか、と聞かれたことがある。未踏峰や未開拓ルートのいくつかを、二一世紀に生きる子供たちのために遺しておいてもよかったのではないかと、といった気がしないでもない。

●新ハイキング選書●

●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山

新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中

※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁

川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)

※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13

☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

報告

REPORT
11月

全国支部懇談会

男鹿半島で「お山かけ」

九月十九日、第十五回全国支部懇談会は秋田支部の手によって、男鹿半島門前にある旅館「磯之家」ではじまった。岡田秋田支部長の心意気が伝わったのだろうか、全国から百六十名余、本部からも会長、副会長全員が参加という熱心さであった。あまりの大人数に、世話役の秋田支



真山神社から「お山かけ」に出発！

部の人たちが二階にはみ出してしまったくらいだ。

海辺という土地柄か、料理は海の幸で埋まった。エビ、カニ、サザエ、ウニ、イカ、ハタハタは言うに及ばず、鱈汁、大タイの刺身とその骨酒が出るに及んで、宴はたけなわとなった。男鹿名物のなまはげが皆の席にきて写真を撮ったり、秋田弁のうまい司会者がいて大いに宴を盛り上げた。日本山岳会は中高年者の集まりになったと言われているが、この熱気がある限り前途洋々であろう。夜遅くまで会員同士が語り合ったことは言うまでもない。

翌二十日は大雨、どうなるかと心配していたら、船が出るころには止んだ。今日は地元で「お山かけ」と呼ばれている真山、本山の縦走に行く日だ。男鹿半島西海岸の門前から加茂青砂まで遊覧船で移動しながら、男鹿の山々を眺めた後、北浦の真山神社から五匹のなまはげに歓迎され

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

ながら登山を開始した。

真山を抜けた本山にかかるころよりどしゃ降りとなった。しかし誰一人止めようという者もない。ひたすら雨に濡れながら登る。本山頂上では航空自衛隊のレーダー基地内にある一等三角点が公開された。普段はとも入れないところだという。日本山岳会だからこそ入れたのだと思ひ、努力された秋田支部の人たちに感謝した。

林道をひと下りしたところに「ザッパ汁」が待っていた。魚汁と貝汁と二つもあり、両方を存分に楽しんだ。この大会のために宿で作られた美味しい「ガッコ」(漬物)もある。こういう昼食こそが一番うまい。来年この大会が行われることになっている岐阜の高木支部長の写真を撮りながら「来年この写真展をするから見に来るように」と言う。もう次の年の準備を始めているのには驚いた。来年の参加者は二百名余を考えているとか。

門前の五社堂に着くころには晴れ間も出てきて、海岸線が光って見えた。海から登って海に戻るこのコースは、本当に素晴らしいユニークなものだった。参加者は男鹿の自然を十分に堪能した。

岡田支部長はじめ秋田支部の方々にはお世話になった。これだけの会

を成功させるには涙ぐましい努力がわれわれの分らないところであつたに違いない。こういう人たちがいる限り日本山岳会は安心していられるような気がする。(中川 武)

自然保護委員会・自然観察山行

木曾・赤沢自然休養林

十月三、四日、恒例の自然観察山行を、日本三大美林の一つ、赤沢自然休養林で行った。参加者二十五名。三日夕刻、上松町・町営ねざめホテルに集合。懇親会は町の差し入れの濁り酒で盛り上がる。

四日、ホテル好意のマイクロバスで出発。赤沢で森林鉄道に乗り換え、十分ほどで終点・丸山渡しに着く。



素晴らしいヒノキの天然林を行く

ここから延長六・五キロの「ヒノキ学術研究路」に入る。このコースは、千本立、奥千本など、ヒノキの天然林が素晴らしいところだが、国有林の「植物群落保護林」にも指定され、一般の入林は規制されている。われわれはとくに許可を得て入林させてもらった。案内は、上松営林署OBの大橋登さん、森林インストラクターの太木泰介さん。大木さんは本会会員でもあり、このたびは大変お世話になった。

大橋さんの名調子の解説を聞きながら、聳え立つヒノキの巨木林の中を行く。木曾五木の話、ヒノキ天然林の成り立ちには、藩政時代の歴史がからんでいるとの話など、興味は尽きなかった。

このたびは好天にも恵まれ、満足のゆく自然観察山行であった。

(自然保護委員・伊藤敏)

三水会・現地集會

丹沢大山集中登山

三水会恒例となった「夏の大山」も七回を数え、八月十五日、長引く梅雨の天候を気遣いながらも大勢の参加を得て挙行された。

大秦野からの北尾根組十名は、アブローチの不便さをタクシー利用で、十時には地獄沢橋の登高開始にこ

ぎつける。このコースは利用者が少なく、丹沢の自然を満喫できる。送電塔下の休憩には、背負い上げた冷たい西瓜が出現し、思いもかけない一涼を味わう。路々に現れる多彩な山草には石井由紀さんによる解説を聞き、展望の開けた崖に出ると標高は一〇〇メートルを超える。十二時半食事に最適な草原に出る。またまた出現する食前酒ローゼワイン。食後は涼風の中、たいした登りもなく予定の十三時半、藪の中より突然山頂に飛び出した。

ヤビツ峠からの四名は一時間も早く登頂し、一行に合流する。

一方、伊勢原からの大山川廻行組十五名は、バス、ケーブルを乗り継ぎ、十時には二重の滝脇の神社でそれぞれワラジ、登攀シューズに足を固め、即一二メートル二重の滝直登にアタック。初級者向きとはいっても、一応名うての丹沢大山沢、二十数段かかる中小滝の直登はなかなかのアルバイトである。所要所はリーダーによる、エイト環九ミリザイルのリレーが登攀の不安を快適にサポートしてくれる。左俣出合いあたりから上はほとんど涸沢、この頃小雨がばらつくが、難なく汗の登行が続く。大部分の滝を直登したせいか行程時間が九十分ほど遅れ、大山山頂に立ったのは十五時をまわっ

ていた。

各パーティーの大山山頂集合はかなわなかったが、十七時には全員無事ケーブル下「もとどき」に集結し、大山下りの汗を流し、楽しい懇談は十九時過ぎまで続いた。参加者二十九名。

(勝田房治)

92同期会・第七回懇親山行

富士山

昨秋悪天候のためやむなく中止にした富士登山に九月二十六、二十七日、再挑戦を試みましたが、またしても天候に恵まれず、七合目の山小屋に到達したところで勇気ある撤退を余儀なくされました。

今回は予想を上回る三十三名(男性十六名、女性十七名)が御殿場駅に集まりました。その日のうちに須走口の新五合目(標高二〇〇メートル)から七合目の太陽館(標高三〇九〇メートル)まで登ることを申し合わせましたが、あいにく本五合目付近から天候が急変し、降雪をとまなう横殴りの風雨となり、ついには登山道のすぐ近くを激流が滝のように流れ落ちるほどの悪条件となりました。

登山道とわれわれの歩行には直接影響がありませんでしたので、時折光る稲妻におののきながら慎重に上

を目指し、夕方小屋にたどり着きました。太陽館には事前に話をつけ、宿泊可能な態勢を取っておいてほしいとお願ひしてありましたが、実際に管理人夫妻に温かく迎えていただいたときには、正直はっとしました。夜は富士山三百十五回登頂の大貫金吾氏の富士山にまつわる数々の話に一同耳を傾け、持参の酒を酌み交わして時の経つのも忘れませんでした。

翌日も風雨は収まる気配がなかったため、はじめての方には大変申し訳ないとは思いましたが、衆議一決、登頂は諦めることにしました。富士山のシンボリックな存在で、近くその使命を終えると伝えられている頂上の観測ドームまではぜひ足を伸ばしたいという気持ちもありましたが、またの機会に譲ることにしました。

御来光、山頂からの三六〇度の眺望、秋の到来を告げる樹々の葉の色の変化、冬支度に余念のない動物たち、その他目に触れるものの限りをじっくり味わつつもりでしたが、今回はかなえられませんでした。

新五合目からは灌木帯を分け入り、地元の人たちが富士山のグラウンドキャニオンと呼ぶ断崖絶壁の秘境コースに足を延ばしました。雨に煙る中にカモシカが足を止め、じっとわれわれのほうを見詰めていたのが印象的でした。

(沼田俊雄)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

信濃支部

第二回ミセスウエストン祭

梅雨が明けず、戸隠高原のしっとりとした深緑の中、第二回ミセスウエストン祭が八月二日に、戸隠キャンプ場入り口のミセスウエストンパークで開催された。

ミセスウエストンと戸隠村の関わりは、明治三十七年八月、ウエストン夫妻が戸隠山から高妻山に登った時、蟻の塔渡りに立つエミリー夫人の写真が発見されたことから始まる。戸隠村では、この写真の原版を買い取るとともに、昨年戸隠キャンプ場入り口にミセスウエストンパークを建設、記念碑を建立し、除幕式典と第一回ミセスウエストン祭を小倉、竹内両副会長を迎えて開催した。

その時「来年は信濃支部が戸隠村に協力して準備してください」と依頼があり、長野県北信在住の会員に案内を出した。八月二日の第二回ミセスウエストン祭は、竹内副会長、山浦信濃支部長他十六名の参加を得て盛大に行われた。

十時開会、国歌吹奏、国旗掲揚、来賓による記念碑に献花、エミリー夫人を偲び献歌、作詞作曲白石美佐代さんの「遥なりミセスウエストン」をガールスカウトが合唱、主催者の横川欣二戸隠村村長が挨拶された。また、本会中村正勝会員が奥裾花源流のゴルジュ帯を遊行中に岩壁から転落重傷を負い、今朝戸隠救助隊により無事救出された旨報告された。彼は松谷会員らと今日の式典に参加の予定であった。

次いで来賓竹内副会長の祝辞、信濃支部の三井嘉雄会員が「ウエストン夫妻の戸隠登山」と題して記念講演。夫妻は赤倉駅から妙高山に登り、柏原から戸隠村に入って戸隠山、高妻山に登っていること、中社の久山館に宿泊しているなど、新しいウエストン夫妻の動行が明らかになってきたとの話であった。

最後に戸隠村の上祖山東保存会の若い人たちにより郷土芸能「獅子神楽」が奉納され閉会となった。

蕎麦処「そばの実」で開かれた懇

親会では、塚本会員が八十九歳の中村喜美会員、上野智四子会員には花を添えていただいたと挨拶、久保田会員の乾杯で和やかな酒宴となる。

戸隠村主催の昼食会に出席していた竹内副会長、山浦支部長も合流。竹内副会長は「ウエストン祭は全国五カ所で行われているが、ミセスウエストン祭は戸隠村が初めてで、戸隠山と高妻山は今後女性登山家に注目されると思われる。信濃支部でも上高地のウエストン祭とともにますます発展させるようお願いしたい」と挨拶された。出席者一同ミセスウエストン祭をますます盛り上げようと誓い合い、散会した。(金子誠吾)

東九州支部

別府湾リレー登山

東九州支部では、月に一度の定例山行を続けている。はじめてからすでに十数年にもなるだろうか。そして毎年度、登る山の選定については何らかのテーマを決めていた。たとえば、支部の創立二十周年を記念して選定した「大分一〇〇山」を数年がかりで消化したほか、「県境を歩く」ということで、隣接する宮崎や熊本、福岡三県との境になる山々を片端から尋ねたこともあった。

その結果が『大分百山』のガイド

ブック発行などの形で実を結んだが、最近ではテーマの選択もいささか種が尽きるようになってきたし、参加者も常連となって限定されるきらいも出てきた。そうしたこともあって、本年度は事務局の西孝子さんらの発案で「別府湾リレー登山」を計画してみた。

ご存知のように、別府湾は瀬戸内海の西にある波静かな湾で、湾奥に大分市や別府市が立地している。その大分、別府の市街地を裏山から眺めると、左に国東半島、右に佐賀関半島が長く伸び、まるで両腕で海を抱くような形である。計画では、この海から逆に大分や別府を見て、その背後にある山並みを完全に縦走してみようと考えたわけである。

別府湾に流れ込む川は、一級河川の大野川や大分川をはじめかなり多い。最初はその水系の分水嶺を忠実に歩こうとの提案もあったが、短期間でのリレーは不可能に近い。ということで、時期は八月、期間は一週間ということにして、湾内から眺められる山、つまり登っていて常に別府湾を展望できる尾根路に限定することにした。

それでも山の数は結構多い。南北両コースに分け、北は国東半島の先端になる国見町の亀崎、南は佐賀関半島の、これも先端の関崎灯台から



25,000分の1地図18枚を1週間で歩く

スタートすることになった。まず二万五千分の一地図をつないでみた。これが十八枚になった。両半島の背骨にあたる尾根から大分市と別府市の背後の山々と、できるだけ稜線を結ぶルートを選んだ。

結局、登らねばならない山が十二市町村にわたって四十座近くになったし、距離にしておよそ一六〇キロ。縦走となれば既存の登山道をただただだけでは済まず、かなりのルート開拓が要求された。リレー地点を決め、会員・会友に区間を割り振って、梅雨明けから下見とルートづくりに取りかかった。

準備を終えて八月十七日未明、南北両端から会旗を先頭にスタート。雷雨の日もあったが天候はほぼ順調。リレーも順調で、会員・会友約五十

人の参加をみた。二十三日正午前に鶴見岳（一三七五メートル）の山頂で両コースが合体した。乾杯、そして日本山岳会バンザイで締めくくった。

マスコミも注目してくれたが、リレー登山の狙いはまず、日ごろから海外や日本アルプスなど高所を志向している会員に、ふるさとの低い山々をも再認識してもらうこと。できるだけ多くの会員の参加を得て、企画力や計画性を養い、共同行動で相互の理解と親睦を深めてもらうこと。さらに付け加えれば、低いヤブ山で真夏の三十度を超える暑さを体験してもらい、乾杯のビールの上まさを味わってもらうことだった。

(梅本秀徳)

岐阜支部

韓国・雪岳山へ

高木碕男隊長以下十一名は、九月二十三日から二十六日にかけて、韓国の最高峰・雪岳山（大靑峰・一七〇八メートル）へ登った。

一行は、九月二十三日、名古屋屋空港を発ち、ソウルを経由して東草空港へ降り立った。五色温泉の五色グリーンヤードホテルへ宿泊。

二十四日は三時に起床し、四時にホテルを出発した。この時刻、日本



ガスで眺望はきかなかったが満足、雪岳山頂上で

との時差がないので真夜中である。空模様は小雨。雨具、ヘッドランプなど身支度しての出発であった。五色登山口までホテルから歩いて二十分と近い。このあたり標高四〇〇メートルである。入山料千ウォンを雪岳山国立公園登山案内所へ納め、一息入れてから歩き出した。真つ暗闇である。ランプの灯で登った。登山道は幅一メートルほどの石の階段でよく整備され、両側は樹木が生い茂った急な上りであった。

あたりが明るくなった六時三十分ころ雨が止んだ。登山道の山側で朝食を摂る。韓国人などの多くの登山者が「アンニョンハセヨ（おはようございます）」と声をかけて追い越して登って行った。

標高一五〇〇メートルほど登った

とき、ガスの切れ目から頂上など四方の景色を一望望むことができた。

九時三十分、登山口から五時間かけて、雪岳山国立公園の大靑峰へ全員が立った。雨こそ降っていないが、あたりはガスで眺望はきかない。けれども、皆登頂できて満足気である。隊長の音頭で「雪岳山バンザイ」を三唱、ビールで乾杯して喜びを共に称えあった。

十時三十分、下山にかかる。小靑峰を経て千仏洞溪谷（雪岳谷）を下った。登山道は鉄製の階段、橋梁などでよく整備されていて、危険なところは少ない。途中に天堂滝、陽滝、陰滝、伍連滝などダイナミックな溪流と、鬼面岩、飛仙台など雄大な原生林の中の景勝を楽しんで下った。ちょうど黒部溪谷の下廊下をややスケールを小さくしたような景観であった。十五時三十分新興寺のある雪岳洞（千仏堂溪谷登山口）へ無事に下山した。この日は雪岳パークホテルで汗を流し宿泊。

二十五日、観光を兼ねて北朝鮮との国境近くの統一展望台へ行き、北朝鮮にある金剛山（一六三八メートル）の方角を眺望したが、ピークは霞んで確認できなかった。

ソウルへ引き返し、ホテルプレジデント泊、翌日金浦空港から帰国した。

(清水芳彦)

福井支部

平家岳
平家落人伝説の秘境の山

当欄についてご意見、ご感想、またおもしろいアイディアなどがありましたら、お寄せください。
総務部

平家岳は越美山地と称する地域にあり、越前と美濃の国境に位置している。この山域は、屏風山など福井県内では最も奥深く静かな山登りが楽しめる。山頂に立てば、白山をはじめ、荒島岳や能郷白山など福井の山が遠望できる。

除雪が完了しないと入山できない山域で、とくに林道は自然に雪が溶けるのを待つことになるので、五月の新緑から雪の降る十一月中旬の紅葉時までがシーズンといえよう。シャクナゲやツツジの咲く五月中旬、七月のニッコウキスゲ、九月のリンドウと、積雪期以外はいつでも登山適期といえる。

今回は送電線の巡視路コースをご紹介します。なお、沢登りを経験したい方は、日ノ谷と追谷を遡行することをおすすめする。

1	コースタイム	面谷登山口－15分－林道終点－10分－渡渉点－60分－巡視路分岐－1時間40分－井岸山－20分－平家岳－20分－井岸山－1時間10分－分岐－60分－面谷登山口
2	記 録	『岳人』(No. 591)1996年9月号
3	地 図	国土地理院 (25,000/1 地形図) 越前朝日 平家岳
4	交 通	J R 福井駅乗り換え越美北線終点・九頭竜湖駅よりタクシーで50分(和泉タクシー・TEL 0779-78-2055)
5	付近の観光地	和泉村ふれあい会館(村の情報が全て仕入れられる) 九頭竜湖 ダム湖で十和田湖に匹敵する面積。 白馬鍾乳洞 虹色の翼を持った白馬がこの洞窟から美濃に消えたという伝説がある。 平成の湯 村営の温泉とホテル、レストランがある。
6	そ の 他	スキー場 福井和泉スキー場と九頭竜スキー場がある。
7	参 考 図 書	『分県登山ガイド 福井県の山』 山と溪谷社 『越前、若狭、山々のルーツ』 福井新聞社 『福井の山 150』 (ナカニシヤ出版) 『越の谷』 (福井岳人倶楽部)
8	問 い 合 わ せ	宮本数男 (会員番号10622)

宮崎支部

かけがえなき水生む源の山
大崩山・湧塚・岩峰

標高一六四三・三メートル。宮崎県内では第十二位の高さであり、山岳美・溪谷美の妙には立ちすくむ。「九州最後の秘境」を自負するほどの深山幽谷の趣がいっぱい。花崗岩からなる山で、この山を中心とする花崗岩体の貫入は約二一〇万年前という。多数の白い岩峰・岩壁を発達させ、ブナ・モミ・ヒメシヤラなどの原生林に囲まれた光景は一幅の山水画である。下湧塚・中湧塚・上湧塚の北側に登山道があり、岩峰に登れる。約三〇〇メートルにおよぶオベリスクとして屹立しているこの山を象徴する岩峰である。一枚岩で、白く滑らかな表面を見せ、登攀意欲をそそるが、岩壁からは未登頂である。

ツクシアケボツツジ、ドウダンツツジなど植物総数は一一九科・五七六種あり、ササユリはこの山の花の女王。山を取り巻く祝子川・溪谷・三里河原は、仙境そのものである。

1	コースタイム	上祝子登山口-30分-大崩山荘-120分-袖ダキ
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1 地形図) 祝子川 (ほうりがわ) 50,000/1 熊田 (くまた)
4	交 通	J R 日豊本線延岡駅から上祝子までバス (宮崎交通KK延岡営業所 TEL・0982-32-3341)
5	付近の観光地	延岡城山公園 (延岡市内) 祝子川のモウソウキンメイ竹林 (北川町祝子川) / 国指定天然記念物 * 節間に黄金色の縦縞が幾筋も入っている猛宗竹で、262㎡の竹林である
6	そ の 他	
7	参 考 図 書	『分県登山ガイド 宮崎県の山』 山と溪谷社刊 吉川満著『宮崎県の山歩き』 葦書房刊 渡部智俱人著『九州 100山峰』 葦書房刊
8	問 い 合 わ せ	大谷優 (会員番号5182) 服部敬二 (会員番号9973)

出羽山地に属し、新庄盆地の西に位置する加無山は、南の女加無山 (めかぶやま・九二四メートル) と北の男加無山 (おかぶやま・九九七メートル) からなり、堂々とした岩壁は、標高は低い、周辺の丁岳 (ひのとだけ) 嶺山 (こしきやま) などと研を競っている。

山体は凝塊角礫と石英安山岩からなり、名だたる豪雪地帯のため著しい浸食作用によって削られた男性的な岩壁は、巨大な屏風状に連なっている。

岩壁には、ミヤマウシノケグサ、エゾカワラナデシコ、ウチヨウラン、イワキンバイなどの寒地形の植物が分布しているが、中でもシコタンソウは貴重である。

北西に鳥海山、南に月山・葉山を眺め、東には指呼の間に雄大な神室連峰を望むことができ、まさに絶景を味わえる山である。



1	コースタイム	林道 (車終点) -120分-加無山登山口標識-40分-挽割-75分-男加無山山頂-75分-挽割-120分-林道終点
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1 地形図) 丁岳 松の木峠
4	交 通	J R 東日本奥羽本線真室川駅から車で40分 J R 東日本奥羽本線新庄駅から車で80分 車の場合 国道13号線~新庄市昭和~真室川町~真室川雄勝線県道35号線~大滝小学校より進入~林道約10km 車の終点 (標識あり)
5	付近の観光地	最上川舟下り 鮭川・羽根沢温泉 新庄温泉 真室川温泉等
6	そ の 他	
7	参 考 図 書	『山形百山』 無明舎刊 『日本の山1000』 山と溪谷社刊 『山形県学術調査 神室・加無山』
8	問 い 合 わ せ	菅原富喜 (会員番号11348) 長岡伸恭 (会員番号10761)

海外の山

ボナッティの日々

江本嘉伸



富士山五合目より山頂を見上げるボナッティ夫妻 (撮影・江本)

アルプスとヒマラヤで注目すべき数々の登攀をやってひとつの時代を画したワルテル・ボナッティが、一九六五年マッターホルン北壁冬期単独登頂をなしたのとは、三十五歳の時だった。彼はこの登攀を最後に「山のアルピニズム」を去り、「荒野のアルピニズム」に移った。

それはなぜだったのか。日本山岳会の招きで初来日したボナッティに「縦の冒険」から「横の冒険」に移ったそのきっかけは、『エポカ』という雑誌の存在である。当時の編集長がボナッティの新たな挑戦に毎号一六ページから二二ページを開放したのだ。

最初の印象的な仕事は？

「寒極へ行ったこと。マイナス七〇度のところでヒトはどうやって生きていけるか、というテーマだった」この試みには、フルシチョフという政治家がからんでいた、と聞くと彼の時代がわかる。

「エポカはどちらかといえば、右寄りの雑誌ですが、当時ソ連のノーボスチ通信という関係を

会って聞くべきことは、第一にそのことだった。

「まず、好奇心旺盛で、想像力、冒險心が強い私自身の性格があった」と、ボナッティは話しはじめた。

「そういう性格がアルピニズムに向かわせたのだが、ある時自分の力を測る基準がぐらついてしまったんです。自分の基準からみてアルピニズムができなくなってしまう。それで別のものが必要になった。新しいものを選ぶ勇氣は必要だったが、私自身は変わったとは考えていない。」

持っていた。ノーボスチの編集長がフルシチョフの個人的な友人だったんです。で、イタリアの共産主義者でも不可能なこの地域に入ることができた」

マイナス七六度の記録を持つ寒極点シベリア・ヤクートのオイミヤコン。そこでボナッティは究極の寒さを体験し、雑誌にレポートを書いた。なにしろ、川も池もカチンカチンに凍り付き、水をどう作るかが大仕事の世界だ。トナカイ遊牧民の知恵が役立った、という。

「火を三角形の三点で炊いて、温度の壁を作り、テントをその真ん中に張るんだ。それなら結構暖かくなる」以後十五年間この地に入った外国人はいない。

野生の動物との出会いも、ボナッティに新たな世界を開いた。

「こういうことを言うと、頭がおかしい、と言われるんだが、本に書かれていることと実際は一致しないね。本には動物は危険だ、と書いてある。しかし、人はもともと動物性を持っており、自然と対話する力が人間の中には眠っていると思う」

ユーコン川をカヌーでひとり下っていた時、岸辺で疲れて毛布をかぶって寝た。朝起きたら、まわりにグリズリーの足跡が残っていたので、

自分が受け入れられた、と感じた、という。「静かにクマを見ていると、二時間ぐらいでクマは去ってゆく。オオカミもそうだ。そういう時、信頼関係ができたのだ、と嬉しい気持ちになる」

「ホワイト・ウィルダネス（原生自然）」の重要さを主張する同じイタリア人のラインホルト・メスナーについては、厳しい見方をする。

「聞かれたので答えるが、メスナーは私とはちょうど反対の極にいる人間だ。当初は自分の後継者と考え、『大いなる山の日々』という本は彼に献じたほどだ。しかし、理想を語り、純粋なことを言いながら、彼がやっているのはビジネスだ」

メスナーのどんな部分をボナッティが批判しているのかは、既にクライマーとしての時代を終えた二人の天才的なクライマーを理解する上で、大事な点であろう。インタビュの情報は、来年度の『山岳』に掲載するつもりだが、言葉を選びながら熱をこめて語るボナッティは、「自分を表現する」ことに意欲的だった。

「元登山家」ではなく人間として純粹に現役でありたい、とその目は語りかけていて、「三十五歳以後」のボナッティを理解する必要をあらためて思った。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

『登山医学知識の最前線』を読んで

松本龍雄

会報「山」の九月号に掲載された中島道郎氏が世界の趨勢から「登山医学」は今後どういう方向に進展していくかとしているのか、の視点からの論文を読ませていただいて感じたことを率直に述べたい。

まず驚かされたのは、オーストリアのベルグホルト博士の「基礎医学、臨床医学の発展を通じて登山関連の疾病、予防に一層の寄与を目指す」とする「呼びかけとしての、高所順応の三つの原則のあまりのオーソドックスさである。

①順応するまではみだりに動き回らず、あまり速く登らない。②一日の行動高度差をあまり大きくせず、前

夜の宿泊地点より三〇〇メートル、個人差を考慮してもせいぜい六〇〇メートル以上高いところには泊まらない。③その日の最高到達地点にいきなりそのまま泊まらない。いったん宿泊地点より少し上まで登り、そこから再び下へ戻って泊まるのがコツである。とあるが、こんなことは一九六九年に私がバミールの七千米トル峰に登頂したとき、そこではすでにそのことは常識化されていた。一九七八年同じくバミールのすべての七千米トル峰三山を速攻した原真氏は、一九八二年山と溪谷社刊行の『登山のルネサンス』の高所順応の方法のなかで、まず法則を知ることとして、「四〇〇〇メートル以上の高山に挑むときは、ゆっくり始める方が結果として速く登れる。この一見逆説的法則が、高所登山の秘訣である。」(三一ページ)と記し、同

三五ページには、一、あたらしく体験する高度差は五〇〇メートル以内とする。二、上部で泊まる場合は、そこより高い高度を体験してからにする、とある。さらに、ベルグホルト博士が「ところでこの高所順応という現象が生じるのは高度五三〇〇メートルまでで、それ以上の高所ではいくらか滞在を重ねてもそれ以上順応は進まず、ただ衰退するばかりである。だから高所登山においては、海拔五三〇〇メートル以上では、高山病を起こさずしかも衰退しないよう、前記三原則を援用しつつ、すばやく頂上を極めて下山することを考えるべきである」としているが、この部分についても原真氏は同書三三ページ基本常識のなかで「高所順応のやり方が、大きな効果をもつのは、三〇〇〇メートルから六〇〇〇メートルの間である」とし、高所にはできるだけ留まらないことを原則として、短期速攻型の登山を提唱している。一九九八年五月の『第三回登山と高所環境に関する国際医学会議』での実践的提言は、確かに傾聴に値するものであるにしても、すでに三十年くらい以前に会員であった、原真氏の提言と寸分の差異もないばかりか、むしろ原真氏の提言のほうがはるかに実践の成果に裏打ちされた精密なものと感じるのは私だけであろうか。

国際登山医学専門医認定制度の発足もまちかたで、『万国共通のカリキュラムに基づく研修と試験によって、国際登山医学認定医』の誕生もあるらしいが、研修と試験だけでなく、高所登山の実践者であるドクターがこうした資格を取得し、登山界をリードしてくれることがよりベターなはずである。会の内外を含めても人材は乏しいと思われるが、できる限り幅広く一人でも多くの有資格者への参加、呼びかけを期待したい。

『登山医学知識の最前線』補足

中島道郎

本誌九月号にこのような標題で、この春松本市で開かれた「第三回登山と高所環境に関する国際医学会議」の内容をご紹介したところ、「その程度の知識なら三十数年も前から言われていたことで、いまさら何が最前線だ」といった反論をいただいた。これは「知識の最前線」という言葉の解釈の違いから出た反論なので、一言補足しておきたい。

つまりこのような反論は、知識の最前線とはすなわち新発見の知識の紹介のこと、と解釈された場合に生

じてくる。しかし今回、筆者がベルグホルト博士の講演を取り上げた意図は、現代ヨーロッパでの定説を紹介することにあった。一般に新発見の知識が学説として定着するまでには数年を要するのであって、定着するまでは、たとえ常識とされていても、単なる仮説に過ぎない。そこで、三十数年前からの常識が今回改めて学説として紹介されたという、そのことに意義があると思ったのである。

日本の先鋭的登山家たちの間では、この会議で、自分たちの知らない実践的新知識が披露されるだろうと期待していたのに、知っている話で失望した、という空気があるやに仄聞する。しかし、もしそうであれば、それはすなわち日本の一般登山家における登山医学の知識水準がそこまで高いということの証左であり、そしてそれこそが日本登山医学研究会が目指してきたことなので、筆者としてはこの反論があったことを非常に誇らしく思う次第である。

信じられない遭難

杉江健介

春の一日、川苔山から本仁田山頂に着いたのは三時半をまわっていた。東京付近での手ごころな登山地、奥多

摩のポピュラーコースなので並の時間には多くの登山者で賑わっているが、この時頂にいたのは一人の若い男性だけだった。二人だけの狭い山頂のこととて気軽に会話が始まった。彼は奇特な人で、この山の山頂名板も大きな板に文字を彫り込んで自分で作ったものだそう。

六ツ石山を正面に眺めながら二人で下る。当然のことながら目前の六ツ石山で去年起きた二名の遭難が話題となった。新聞での遭難記事は小さなものだったが、私は驚いた。何であのあたりの山で、それも無雪期に。水根沢にでも迷ったのか、熊にでもでくわしたのか？

案外早くその六十代の男性登山者二名の墜落遺体は発見されたが、詳細は分からなかった。釈然としないまま何とか詳細を知りたいものと思っていた。何しろあまり身近な山で、二人も同時に同所で墜落するような危険な個所があるとは思えず、不思議な話だった。

何カ月か経って偶々つけた地方テレビにその遭難の詳細が放映されていた。台風後の倒木、道迷い、新規開拓された岩登りグレレンデ、会山行の下見だったとか。連れの彼もずっと遭難の詳細を知りたいと考えていたそう、私の話でやっと腑に落ちたたのことだった。

登山者にとって他人の遭難話は単なる興味本位ではない。とくに最近、中年登山者の爆発的増加は、以前は岩登りや沢登り、雪山がほとんどだった遭難が、一般コース、それも信じられないような安易なコース、高水三山や奥高尾、道志などでの事故の発生を考えると、文字どおり他山の石とさせていたがたいのが人情であると思う。

最近になってその遭難捜索にかかわった山岳救助隊長の手記を読む機会を得たが、事故の顛末がよく分かり、私としては胸のつかえが取れたのだが、一番肝心の遭難者がなぜそんな岩場に至ったのか、の心理への言及は当然ながらされていないのは残念だった。

よく登山は自然にかかわる遊びだし、人間も自然の一部なのだから遭難とは、気象や地形、体調と技術や装備、パーティーなどの因果関係を調べれば、必ず原因が究明できるはずだ、といわれる。しかし私は思うのだが、もはや壊れかけた自然となった現代人である。その不自然な深層心理の呪縛を解き放つのは容易なことではないだろうし、といって人間の心理、精神をタブー視していたのでは遭難の真の解明は不可能だと思う。確かに個人のプライバシーに関わることだけに難しい問題に違

いない。一般的な登山者心理と個人の変性意識の関連、癒しや健康面などスポーツ心理学的アプローチも、今後要求されるのではなからうか？この点、最近読んでとても共感を覚えたのが『死者は還らず―山岳遭難の現実―』（丸山直樹著・山と溪谷社版）だ。事故を追って行くとその背後にほとんどの場合、事故の直接原因とは一見何の関わりもない個人の平常ならざる心理が絡んでいるという。

最後に私にとって示唆的な一冊の本がある。昭和五十六年発行の元山岳雑誌編集長N氏の訳書で、題名は『信じられない偶然』。今や知る人ぞ知るユング心理学、共時性（シンクロニシティ、偶然の一致）を一般的な形で紹介した最初の本だ。

自然への畏怖を肌を通して感じてきたわれわれ登山者にとって驕らず、謙虚に山に登りたいとつくづく思う。

憧れの冬季マッキンリー

栗秋正寿

平成十年二月十三日、私はひとり暗いカヒルトナ氷河に立っている。短い日照時間で太陽が低いため、冬のカヒルトナベースキャンプ（二一三〇メートル）は終日陽があたりな



バックはマッキンリー南峰、カヒルトナ氷河上

い。快晴、南西の弱風、気温マイナスイ二〇度。フォレイカー北東壁で起きた雪崩の轟音が、辺りに響きわたる。昨年引き続き、二回目となる冬季マッキンリーの山旅。懐かしい思いでマッキンリー南峰（六一九四メートル）を見上げている。

昨年の反省から、登山時期を約二カ月間に延長。そのため、食糧、燃料、装備合わせて一〇〇キロの重量となる、頑強な雪ブロックを積み上げ、その内側にテントを張る。純白の雪をコップフルにすくい、お湯を沸かす。甘い紅茶を飲みながら、耳を澄ます。風の音だけが聞こえる。山に向かって「またここに戻ってきました。昨年同様、風雪やブリザードで行く手を阻むことでしょうが、どうぞお手柔らかにお願いします」と心の中で呟く。（中略）

三月八日、午前七時五十分、キャ

ンプ7を出発。南の微風、気温マイナスイ二七度。

入山して二十四日目を迎える。アタック出発時、気になった点がいいくつかある。朝焼け、西の空のブロックン現象、頂上から南側にある薄い雲、どれも、天候悪化の兆しである。

デナリパス（五五五〇メートル）ヘトラバースを開始。途中、三カ所もあるヒドンクレバスに気づき、冷や汗をかく。キャンプを出発して一時間四十分でデナリパスを通過。順調なペースである。南の風が次第に強まり、頂上の南側にあった雲のこ

とが気にかかる。

アタックキャンプを発つてすでに四時間が経過しようとしていた。標高五九〇〇メートルの大プラトーから南峰へ続く最後の登りにさしかかった。南側からの不気味な風が灰色の雲を運び、頂上付近やその南側だけでなく、マッキンリー北峰までもがホワイトアウトの白いベールに包まれつつあった。天候悪化と容易に判断できる。進むべきなのか、それとも戻るべきか。この時すでに、もう一人の私の葛藤が始まっていた。「急げ！ 山頂はもう目と鼻の先にある」と自身に言い聞かせるが、「落ち着け！ 大雪原でガスに巻かれれば、死のビバークを余儀なくされるのを忘れたか」と別の私が叫んでい

る。登高スピード、天候悪化の度合い、また帰路についての視界確保について考えた。

前進と決定。後は時間との闘いである。雪洞掘りの最中に壊した右の眼鏡が曇ったまま凍ってしまう。左目だけで頂稜直下のヒドンクレバス帯を何とか越える。最後の大きな雪庇を通過した途端、マッキンリー南峰（六一九四メートル）が視界に飛び込んできた。

午後一時六分、登頂。

ガス、南からの疾風、気温マイナスイ三七度、気圧四六六ヘクトパスカルという気象条件であった。頂上での滞在時間、わずか一分。写真を数枚撮りながら、考えていたこと……。

登頂していったい何が変わるといのか。山が変わるわけでもない。それではなぜ、私は今こうして立っているのか。山頂は何も答えてはくれない。もし仮に、何かが少しでも変化するのであれば、登山者の心の奥深くにあるものであろう。山頂には登山者の夢がある。その頂に立つて夢が実現すると同時にそれが消え、そして新たな夢がまた一つ生まれる。嬉しいという気持ちと悲しいという気持ちが交錯していた。そういう思考を繰り返すことにより、登山者の心が少しずつ深められていくのであろう。

アタックキャンプへ下降しながら今回の山行でもっとも印象に残った光景を回想していた。今から一週間前、キャンプ5（三七〇〇メートル）の雪洞から眺めた夕焼けの美しかったこと。感慨無量を替え歌にした。

夕焼けこやけで日が暮れてデナリに冷たい風が鳴る、
暖かい雪洞の中入る寒気と一緒に
入りましょう、
食事が終わった後からは 空には
無数の流れ星、
シュラフでガタガタする頃は天には
ゆらゆらオーロラよ、

*原稿は登頂時のみ、全文は『山岳』に掲載します。

年末出発カトマンズ行 特別運行便

12/26(土)～1/3(日) 9日間 日本各地発着
ソウル経由

12/28(月)～1/5(火) 9日間 関西空港発着
JAZ便

ヒマラヤ・トレッキング各コース設定



運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL 03-3503-1911
大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

田部井淳子・編

『エヴェレストの女たち』

「エヴェレストへの女性の挑戦には男性の場合以上に時代の個性が読み取れる。エヴェレストの女性登山史を追ってゆくと、それがそのまま現代女性史の側面であることに気づくのである」と本書にあるが、この本からはそのとおり、その時代、その国を背景にした、女たちの挑戦の様がそれぞれの個性とともに見えてくる。

九六年五月難波さんが登頂、そして悪天につきまわり、ついに還らなかつた登山の様子も加わり、九五年に東京で開かれたエヴェレスト女性サミット、ネパール・ヒマラヤ登山の生き字引ともいえるエリザベス・ホウリー女史のネパール・ヒマラヤに

挑んだ女性の登山史、女性登頂者への興味あるアンケート、終章には女性による高峰登山の進展と、実に盛りだくさんの内容からなり、読みはじめたら時間の経過も忘れてしまう。
(渡邊玉枝)

一九九八年七月 山と溪谷社発行
二八六ページ 千五百円

渡辺正臣・著

『富士山に魅せられて七十年』

著者が生前世に出した山のガイドブックは、北海道から北アルプスまで三十種。しかし愛してやまなかつた自分の山は富士山だった。百回に及ぶ富士山通いの中から十六編にまとめられている。序章は両肺を冒された病弱の二十歳の時。そして富士に魅せられた(一九三八年)。横さんのアルパルター初登頂を心から祝福してくれたカーター博士が戦後来日した際同行した富士(一九四六年)。川崎隆章氏との剣ヶ峰大沢右岸の初登攀(一九五二年)。終章は七十五歳のフィナーレ富士、富士宮新五合目から頂上を踏む。霊峰富士高齢登拝者番付にのった。

本書に別冊「各地にある富士山」が添えてあり、日本はもちろん、南北千島、アジア、オセアニア、アメリカ大陸にある富士山合わせて四百

八十三山の位置、標高などが調べ上げられ、著者の富士山に対する入れ込みようがうかがえる。

本書は著者が生前刊行を果たせなかつたものを、三回忌に合わせて遺稿集として刊行された。(國見利夫)

一九九八年五月 一九七ページ
別冊七〇ページ 私家版

原田真知子・編

『山のスケッチブック』

仲間達へ 原田達也遺作集

本書は表題のとおり山で描いた水彩のスケッチ集であり、それに山のエッセイがつけてある。これらの山の絵が素晴らしい。

著者は本会の海外連絡委員会委員であり、アグレッシブなクライマーで、一九九五年、六十歳の時シヤパンマハ〇〇八メートルに登頂しているが、その二年後にスキルブルムで雪崩れにより生涯を閉じた。

それにしても本書の絵は楽しい。カラコルムの絵が多く、全部で五十四枚ある。これだけあると、絵の具のおき方、手数(てかず)のかけ方などに読者が気づくところも出てくる。

「ああうまいな、こうやったら自分も山でスケッチを描けるかしら」と思わせる魅力に満ちている。エッセイは穏やかでまったく肩張

らない。いい山の生涯を終えられたのだろう。

「単独行は何が楽しくて山に行くのかな、と思います。二人だったら二倍、三人だったら三倍の感動があるのではないかと思うのです」と書かれています。
(松丸秀夫)

一九九八年八月 原田達也遺作集
編集委員会発行(神奈川県大和市
西鶴間六―三―七 TEL・〇四六二
―七三―〇一〇九)
一八一ページ 三千円

西丸震哉・著

『机上登山』

本を読む前に、私たちが過去に歩いた五万分の一の地図を広げてみよう。そのうちに、歩いた峰々、谷々が頭の中を駆け巡ってくるであろう。そして地図に対する疑いを抱いたことがあったらどうか。最近では、指道標も完備されていて、地図を広げることが少なくなってきたのも事実である。

しかし「自分の好みは自分で探せというのが基本である」と著者が言っている如く、地図上でこのルートを歩いたらどのような地形をたどるのか、どのような景観になるのかという探索を深め、未知なる世界に没入していく楽しさを心ゆくまで与

えてくれる。

山の自然界に吸い込まれていく魅力ある本であると同時に、いつか訪ねてみようという夢を与えてくれる好著である。

(藤井昭孝)

一九九八年四月 博品社発行 二五三ページ 千八百円

松本健夫、武石千雄、佐藤眞一、佐藤三千代、甲斐素純・共著

『九重の自然と歴史』

九州の岳人にとって九重山は心のふるさとであり、やすらぎの場所でもある。本書の冒頭「わが九重」で梅木秀徳東九州支部長は、九州の岳人たちを育てた「ゆりかご」であるとも表現している。まさに九重山とは、そういった言葉にぴったりの山ではないだろうか。

執筆者はこの九重山にこだわりを持つ五人。(一)火山・地質誌編をくじゅ連山の地質研究で知られる福岡支部長松本氏、(二)動物誌①は日本野鳥の会大分県支部長の武石千雄氏、(三)動物誌②を大分生物談話会長の佐藤眞一氏、(四)植物誌は地元森林組合長の佐藤三千代氏、(五)歴史・民俗誌を同じく九重町総社宝八幡宮司の甲斐素純氏がそれぞれ執筆し、最後に「九重山記」について高校教諭の田本政宏氏が触れている。

平成七年十月の硫黄山噴火や生息が確認されたイヌワシのつがい、泉水山麓の野焼き、九重連山やそれを囲む飯田高原、久住高原の最近の話題や新しい情報も盛り込み、植物と人との関わり、歴史と文化、民俗にもスポットをあて、身近な視点でまとめている。本文中の写真も四季それぞれの素晴らしい九重を紹介している。

九重の山をこよなく愛する九重ファンにとって「山」六二九号で紹介された梅木秀徳著「九重山博物誌」とともに九重山を知る上での参考書である。

(加藤英彦)

一九九八年六月 葦書房発行 三六八ページ 二千五百円

日本山岳会東海支部・編

『山は知っている』

一環太平洋一周環境調査登山の記録一

本書は東海支部による環太平洋一周環境調査登山の記録である。

一九九五年六月、カムチャツカのトルバチク山を皮切りに、九七年五月の富士山を打ち上げるまでの二年間にわたる山行と酸性雪(雨)調査のデータをまとめた報告書である。

対象の山は、アラスカのマッキンリーから、南極はビンソンマシフまで、東はボリビア・アンデスのイリマニから、西はインドネシア、バリ島のアグンに至るまでの太平洋を囲むリム上の山の中から三十三山が選ばれた。その中の二十九峰の登頂に成功している。しかし、この遠征目的は環境調査にあったから、初登攀や新ルート開拓の記録はない。

環太平洋の登山計画は、篠崎登山隊長が私案として持っていたものであった。これを東海支部の遠征行事としたのは時代の流れであった。酸性雨がもたらす環境汚染を地球規模で捕らえたい、という社会のニーズに応え、PACIFIC RIM ENVIRONMENTAL RESEARCH EXPEDITIONS PROJECTとなった。

この環境調査を成功させるのには相当数のピークに短期間に登り、それぞれの山頂で検体を取り、持ち帰らなければならぬ。これは最終データの比較分析の上から求められるものであった。この辺の難しさから、これまでの環境調査は断片的にならざるを得なかったのである。ならば、調査範囲を地球規模に広げてやろう。短期間に高所の雪を採ってこよう。となつて、専門家の期待をになうことになった。

学術総隊長の中井信之名古屋大学名誉教授は、基本方針を三つに絞られた。①北半球の環境汚染が南半球

にも拡散していないか。②北半球でも経緯により、汚染度を調べる。③汚染の程度が標高によって、どのように変化しているか、であった。

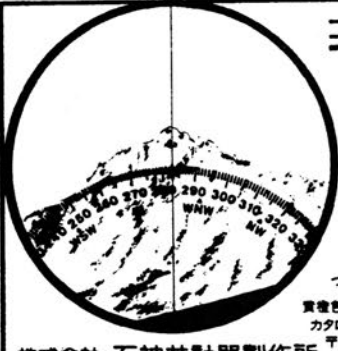
それで、アコンカグアでもマッキンリーでも、厳しい状況下で、検体を指示されたとおり正確に採取しなければならなかった。このあたりの努力が高く評価されて、ロレックス賞の受賞につながったものと思われる。英文サマリーもある。(杉田博)

一九九八年五月 マック出版

一八九ページ 申込は東海支部へ 荷造り送料共 二千九百円

(郵便振替番号 00800-5-13749)

日本山岳会東海支部)



コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目標が重なるように見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
実色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所



ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力くださった方々のご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略)

29名 64口 320,000円 (10月9日現在) 累計881名 2,427口 12,154,517円

● 6口 (30,000円)

石岡慎介 橋本清 J A C 95同
期会

● 4口 (20,000円)

明治学院山岳会

● 2口 (10,000円)

原田久江 津田清昭 中村進
西郡光昭 村井田博 東真澄
武田満子 宮崎紘一 庄司駒男
三浦繁司 服部尚 柳沢勝輔
嶋崎兵市 高櫻英輔 奥村マツ
子 池戸誠二郎 高森建二

● 1口 (5,000円)

山岡慶子 稲葉十四男 伊藤敏
男 鳥海宣和 田上和儀 小笠
原岩雄 一山了 清水久雄

書籍受入報告 (1998年9月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
ナムナニ登山隊(編)	ナムナニ峰登頂：ナムナニ峰登頂と3000キロ辺境の旅	86pp/30cm	日本山岳会福岡支部	1998	発行者寄贈
群馬県高校教職員登山隊	チャウチャウカンニルダ：秘境スピティ 遠征の記録	124pp/26cm	群馬県高校教職員登山隊	1998	発行者寄贈
宮原弘之(編)	ヒマラヤの風に吹かれて：3隊35人の記録	218pp/27cm	J R 東日本山岳会	1998	発行者寄贈
日本放送出版協会(編)	中年のための登山学：日本百名山をめざすⅡ (NHK趣味悠々)	166pp/26cm	日本放送出版協会	1998	出版社寄贈
岡田朝生	山と音楽と	203pp/22cm	岡田朝生(私家版)	1997	著者寄贈
清水武甲先生顕彰会(編)	清水武甲先生顕彰碑竣工記念誌	/31cm	清水武甲先生顕彰会	1998	発行者寄贈
江本嘉伸・戸高雅史・他	A L I N E：地平線の旅人	255pp/19cm	求龍堂	1998	出版社寄贈
東京YWCA山岳会(編)	東京YWCA山岳会と深雪小屋	109pp/19cm	東京YWCA	1996	戸村愛子氏寄贈
辻村伊助	ハイランド (平凡社ライブラリー No. 262)	324pp/17cm	平凡社	1998	出版社寄贈
高橋洋二(編)	人はなぜ山に登るのか (別冊太陽 Autumn 1998, No. 103)	162pp/29cm	平凡社	1998	出版社寄贈
樋口敬二 他	ひとはなぜ自然を求めるのか：余暇開発センター集中セミナー	224pp/20cm	三田出版会	1995	著者寄贈
樋口敬二	旅でみた家：樋口敬二スケッチ集	/23cm	樋口敬二先生退官記念事業会	1991	著者寄贈
神奈川ヒマラヤンクラブ	スキブルム7360：夢は白き氷河の果てに	126pp/30cm	神奈川ヒマラヤンクラブ	1998	発行者寄贈
原田真知子(編)	山のスケッチブック：仲間たちへ 原田達也遺作集	181pp/22cm	原田達也遺作集編集委員会	1998	編者寄贈
田中文夫	ヒマラヤに学ぶ：未踏の大岩壁P 29南西壁登山1978年の記録	283pp/27cm	田中文夫(私家版)	1998	著者寄贈
宮澤泰	わが思索の旅：文学・音楽・山	242pp/19cm	宮澤泰(私家版)	1998	著者寄贈
チェセン(著) 近藤等(訳)	孤独の山：ローツェ南壁単独登攀への軌跡	221pp/20cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
岩合光昭	A N I M A L S：地球の野生動物 (山溪カラー名鑑・別冊)	607pp/20cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
池内紀	山の朝霧 里の湯煙	254pp/20cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
垣外富士男 他	長野県の山 (分県登山ガイド No. 15)	143pp/21cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
山下直樹	赤石・聖・荒川三山を歩く(フルカラー特選ガイド No. 17)	143pp/21cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
環境庁国立環境研究所(編)	E n V o c 環境用語マルチリンガルソーラス(日本語版)第4版	318pp/30cm	環境庁	1998	発行者寄贈
日本林業技術協会(編)	オオカキ等の保護と人工林施業等との共生に関する調査研究 (平成9年3月)	118pp/30cm	前橋営林局	1997	龍久仁氏寄贈
JAC自然保護委員会(編)	シンポジウム『絶滅から救おう高山植物！保護と盗掘防止を考える』	32pp/30cm	JAC自然保護委員会	1998	発行者寄贈
北海道高山植物盗掘防止 ネットワーク委員会	市民グループによる高山植物盗掘防止ハンドブック98	30pp/30cm	北海道高山植物盗掘防止 ネットワーク委員会	1998	発行者寄贈
American Alpine Club	The American Alpine Journal (Vol.40, Iss.72, 1998)	439pp/23cm	American Alpine Club	1998	発行者寄贈
A. Pollard & D. Murdoch	The High Altitude Medicine Handbook (2nd ed./Updated & Expanded)	165pp/24cm	Radcliffe Medical P.	1998	購入

会務報告

【九月理事会】

日時 九月九日(水) 十八時三十分～
二十一時三十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 齋藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、吉永、田邊、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯨坂、増山、森、大蔵、宇田川、宮崎、坂本各理事、石橋、神崎各監事、穴田、長尾、中川、平野、中村各常任評議員「委任」 平山常任評議員

【審議事項】

一、事務局職員補充の件 絹川

森田職員が八月三十一日付で退職、飯田橋ハローワークを通じて求人選考、早急に補充採用としたい。

二、学生部ブータン遠征隊資金貸付等の件 宮崎

①目的 現役学生の遠征への参加をより容易にすると共に、学生登山の活性化を図ること。

②対象者 日本山岳会加盟大学山岳部の現役学生。

日本山岳会が主催する海外遠征計画に参加するためであり、かつ個人負担金が一人五十万円を超えるものであること。

③貸付限度額 一人二十万円まで。

④貸付期間 卒業後一年以内とする。
⑤金利 年利一パーセント程度。
⑥保証人等

・日本山岳会会員で日本山岳会が妥当と認める保証人の連帯保証をつける。

・借り受けた学生については、卒業後遅滞なく日本山岳会に入会することを義務づける。

⑦会計上の処理

・予備費より支出する。

・決算書には「貸付金」として記載。*以上は制度ではなく、そのつど申し入れて理事会審議事項とする。

ブータンヒマラヤ登山隊一九九八緊急対策本部マニュアル提出 承認

三、「新編日本山岳誌」の件 飯田

七月二十四日、高木岐阜支部長、高木泰夫事務局長、ナカニシヤ出版、小倉副会長、図書委員がルームで編集の基本方針を確認。

①新たに編纂するものは「新編 日本山岳誌」とする。

②旧「日本山岳誌」編述のコンセプトは原則として踏襲、内容は一新して現代にふさわしいものにする。収録山岳も新たに選定。

③収録山岳の選定、当該山岳の記述量、記述内容、挿入の写真、地図などについては、各支部の編集委員、執筆者と協議し決定。

④「新編 日本山岳誌」の編纂刊行

を日本山岳会創立百周年記念事業の一環とする。各支部より編集委員を選出し、年一、二回の編集会議で協議決定(主管者は提案者の岐阜支部になる)。なお、編集会議出席者には交通費を考慮。

⑤版元は(株)ナカニシヤ出版(了承済み)とする。承認

同著者の『高山深谷』は補修を依頼、保存ケースに個別収納とする。

費用は図書管理委員会予算を充てる。

四、名義後援依頼の件 絹川

(注)日・豪・ニュージーランド協会会長名で、E・ヒラリー卿訪問を組み入れた体験ツアー企画の名義後援依頼が出されたが見送りとする。

五、写真借用願の件 絹川

(株)レマン：トランヴェール編集部より、JR東日本発行月刊誌「トランヴェール」十一月号「外国人の旅した東日本」(仮題)にウエストンの写真掲載許可願が出された。承認

六、推薦状交付願の件 伊丹

本会会員統素美代会員(一二三〇七)より、ヒマラヤン・ガイド・アマダラム登山隊一九九八(公募隊)参加につき、交付許可願が出された。厳格な念書提出を求め、会員個人に対する推薦状交付を認めた。承認

*本件を契機として、今後多様化が予想される会員個人の海外登山にも、会員サービスの一環として所定の手

続きで応じてゆくことを確認。

七、ポカラ山岳博物館募金 伊丹

九月八日現在、八百五十九名、二千三百三十九口、一千七百七十一万四千五百七十七円。今後は現場の状況を確認し、日本山岳協会などと協議。

八、秩父宮記念山岳賞 竹内副会長

①八月三十一日締切時点で十一名の応募があった。

②九月四日運営・審査合同委員会開催、互選で小田稔審査委員長を選任、議事に入り「応募推薦者が審査委員に加わるのは公正ではない」との意見に賛成多数。審査委員の白紙撤回が承認され、新委員の選任を小田審査委員長、竹内運営委員長に一任した。

③新審査委員を、渡辺兵力、村木潤次郎、中村純二、大森薫雄、樋口敬二、重廣恒夫、岡島成行、絹川祥夫各会員に委嘱(特別審査委員の委嘱もあり得る)。

④九月十一日、第一回審査委員会開催、業績ごとに審査担当決定。

⑤九月十七日、第二回。審査を重ね、投票形式で候補を絞る。

⑥運営委員会は十一月五日(予定)候補業績を会長に提出する。承認

【報告事項】

アルバート・峰プロジェクト・熊崎

八月、熊崎理事がカナダ山岳会訪問し、会長、代表メンバーと会談。

①十月十八、二十一日、カナダ山岳会のマイク・モートイマー会長がマレーシアでのUIAA総会の帰途日本で、アルバータ・プロジェクトに関して打ち合わせしたい(二十日に歓迎会開催予定)。

②十月三十一日、カナダ山岳会の年次晩餐会に、日本山岳会会長、プロジェクトの担当者を正式に招待したい。
会長了承

山研委員会・坂本

①八月二日、山研・資料展示室で「自然エネルギー展」オープン。二十二日終了日までに、群発地震にもかかわらず、入場者は四百名を数えた。

③上高地ビジターセンターより「山研で展示しているパネル、発電機材一式をそのまま借り受け、引き続きエネルギー展を開催したい」との申し入れがあった。期間は十月十八日まで、会場は山研資料室使用で、との依頼のため「好評により会期延長」として引き続き開催している。

科学委員会・森

今回の「自然エネルギー展」を契機として、「ミニ水力発電計画」に関する反響が大きく、計画が理解されたようだ。

海外連絡委員会・伊丹

①ボナッティ氏は九月十八日成田着、

十月五日離日。十八日歓迎会を十八時より国際文化会館で開催(八名出席予定)。

②ガンカー・プリンスム峰偵察は十月十三日、十一月二十三日の予定。

科学委員会・森

「火山ガス災害に関するシンポジウム」は九月十九日、十四時十七時法政大学富士見校舎で開催された。ネパールトレッキング・吉永

申込者百十五名(残席十)

「JACCネパールトレッキング」

実行委員会

委員長(留守本部長) 小倉副会長

事務局長 吉永

委員 大森、絹川、伊丹、勝山

顧問(現地)松田、斎藤会長、大森、

吉永、神崎、長尾

青年部・宇田川

カンチエンジュンガ登山隊一九九八、遭難反省報告会を速やかに開催するよう、現在日程調整中。

資料委員会・鯉坂

①ホームページオープンについては、ルール細則を定め十月理事会に報告。

②山研・資料委員会は来年度も「自然エネルギー展」に続くものを検討中。

図書管理・小倉副会長

九月十六日、財産管理の見地で、財務、総務、図書担当で第一回小委

員会を開催する。

総務委員会・絹川

①全国支部懇談会 九月十九、二十日 主管・秋田支部 百六十名参加予定。

②評議員会議 十月十七日

*予備会議として事前に常任評議員会の開催をお願いしたい。

③新入会員オリエンテーションは十一月七日開催予定、対象者約百六十名。

■会員異動

物故

河合文恒(九九五二) 10・8・16
川崎泰男(七六〇〇) 10・8・22
宮田菊雄(九九一六) 10・9・18
田口二郎(一五九〇) 10・9・23
三宅次郎(八八六一) 10・9・24

ルーム日誌

9月

1日 アルパインスケッチクラブ
山げらの会 学生部
2日 自然保護委員会 海外連絡委員会 学生部 アルパインスキークラブ
3日 会報編集委員会 山学研
4日 秩父宮記念山岳賞運営委員会 フォトビデオクラブ 学生部
5日 ビールパーティー

7日 総務委員会 資料委員会

8日 二火会 アルパインスケッチクラブ 百年史委員会 95同期会

9日 理事会

10日 青年部

11日 秩父宮記念山岳賞事務局 S

UN燦会

16日 三水会 フィルムビデオ委員会 山研運営委員会

17日 秩父宮記念山岳賞事務局 科学委員会 フィルムビデオ委員会 常任評議員会

18日 自然保護委員会 総務委員会

21日 総務委員会 アルパインスキークラブ 図書委員会

22日 自然保護委員会 山岳編集委員会

24日 データバンク研究会 集会委員会 JACCヒマラヤトレッキング実行委員会

28日 秩父宮記念山岳賞事務局 緑

爽会 アルパインスキークラブ

29日 自然保護委員会 97同期会

30日 学生部 9月来室者670名

■訂正

「山」十月号(No六四一)三ページの写真説明に誤りがありました。左側の人物は井上松本商工会議所会頭です。お詫びして訂正します。

INFORMATION



◆第六回写真展開催

アルパインフォトクラブ
写真展「心に映る山々」を開催します。国内外の山岳自然写真六十点を展示。ご来場をお待ちします。
日時 十一月二十一日(出)三十日(月)
会場 東京西新宿・三省堂文化館
TEL・〇三・三三二〇・二六六一

◆第七回「山を語る」

図書委員会

シルバートートル隊がガッシャーブルムⅡ峰の登頂に成功し、大いなる称賛を得たことは、耳新しいニュースです。同隊が行った八千メートル峰三座すべての登頂に成功した渡邊さんに、新鮮な話をうかがいます。
日時 十二月十一日(金)十八時三十分
場所 日本山岳会集會室
講師 渡邊玉枝会員

◆スキー懇親山行のお知らせ

集會委員会

白馬八方尾根スキー場で開催します。終日ゲレンデを縦横無尽に滑りまくるもよし、唐松岳へのツアーもよし。ふるってご参加ください。
日時 平成十一年一月十五日(金)十

平成十年度 海外登山基金 助成登山計画募集

海外登山基金委員会

平成十年度の海外登山基金による助成登山計画の募集を左記の要領で行います。ふるってご応募ください。

記

対象 平成十一年二月一日〜平成十二年一月末に出発する登山隊。

・会員の推薦があれば隊の規模の大小は問いません。
申込方法 所定の様式(本会事務局に請求してください)に記入し、登山計画書(十五部)を添付して申請してください。
申込締切 平成十一年一月二十日
審査ならびに交付の時期 平成十一年一月中に審査を行い、二月の理事会で決定。二月中旬〜三月末までに交付します。
交付金額 百万円

七日(回)

宿泊 八方池山荘

費用 二万円程度

申込 十二月十日までハガキで

〒三三四・〇〇五七

川口市安行原一六二・三三五

勝山康雄宛

*申込者には詳細をお送りします。

◆自宅でできるトレーニング講座

山げらの会

「楽に登りましょう。筋肉痛よさうなら」をテーマに、ストレッチングと道具を使わない筋肉トレーニングのエクササイズを毎月一回行っています。ご参加ください。
日時 十二月九日(水) 一月二十七日(水) 十八時三十分〜二十時

会場 日本山岳会ルーム

服装 軽装、敷物をご用意ください

申込 TEL & FAX・〇三・三四五一・五三八八 三井まで

*参加費無料

◆会員名簿探しの協力お礼とお願い

百年史委員会

「山」六四〇号で、初期の会員名簿探しをお願いしたところ、さっそく二名の方よりご提供いただきました。お礼申し上げます。

・山岳第七年第一号付録の名簿

富山支部 松村寿会員より

・山岳第一四年第二号付録の名簿

信濃支部 三井嘉雄会員より

◆編集後記

なお、三井会員からのものは松本市立図書館が所蔵している山岳合本の中よりコピーして送付されたものです。残りの名簿についても会員の皆様のさらなるご協力を期待しています。

十月十三日、カンチエンジュンガの報告・検討会が国立オリンピック記念青少年総合センターでありました。松本龍雄会員からも高所医学に関するご意見をいただきました。

高所登山は高所医学に先行して進化を早めているように思われます。ハイアルティチュード・クライマーにとってはますます自己管理の戦術を極める必要に迫られているのではないのでしょうか。

今号の巻頭は森武昭会員の火山ガスの危険性についてのシンポジウム報告です。中高年登山者にとっては油断のならない問題のひとつと考えます。無事故を祈念しつつ……。

日本山岳会報 山 642 号

1998年(平成10年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社